

●春日部市民文化講座（第39回） 「茶の湯の道具の話し」

◆日時：2022年4月27日(金) 11時（ばぼら春日部4階会議室）～12時

■茶の湯の道具の話し その2

今日のテーマ「点前座の道具」というのは、ぼくにとって難題です。何故なら日頃皆さんが使っている茶の湯の道具、皆さんが持っている「点前座の道具」ですから、当たり前のごとで、1+1は何で2なのかというようなこととお話するのです。何で茶碗がこんな形なのか、何でこれが良いのか、だって十人十色って言うじゃないですか。そういう中で、利休さんの侘茶の点前のカテゴリーというのができているのですよね。

さて、レジュメを見ていただきたいのですが、最初に点前座にある道具について並べました。そして、ぼくが40年間扱ってきた道具について、茶碗と茶入・茶器が珍重されてきたということを書きました。皆さんがお茶をいただくと、「お棗拝見」とか「お茶器拝見」って言うでしょう。あれね、客から「拝見」と声を掛けなければ失礼にあたるのですよ。表千家では、「おもてなしする側から道具について『これはどうだ』』というのを言ったらお終いだからね」と教えられてきました。ですから、表千家では茶碗や茶入・茶器などについて聞かれなかったら答えないですね。客のほうで聞かなかったら、折角出した道具も全く分からないままに茶席が終わってしまうのです。お茶会に出て正客に座る人は、それなりの学びをしていなかったらダメなのです。お茶会に行くのであれば、それなりのグループの中で自分を磨き上げなければなりませんね。

■会所の茶から侘数寄へ

レジュメのⅡで「会所の茶から侘数寄へ」とありますが、会所というのは現在では見られない場所で、足利時代に歌会や闘茶などの遊興娯楽の集まりのために、住宅の中に造られた施設のことを言うのですね。

そこで茶が振る舞われていて、室町時代には「茶室」という言葉は無かったのです。ですから、金閣や銀閣ができた頃には、会所にみんなが集まってお酒や料理も振る舞われて遊んでいたのですね。それが、何故か利休さんの時からガラッと変わって、会所でのお付き合いではなく、茶室でのお付き合いになったのです。茶席、庵(いおり)になって集まる人数もぐっと狭められたのですよ。最終的には二畳ですから1対3、亭主1人と客3人まで狭められました。それが国宝「待庵」であり、今でも残っているのです。お茶をやっている方は、ぜひ行ってください。和尚さんの奥様が今でも管理されていると思うのですが、ぼくが行くと「こんなボロボロの建物が今まで残っているのは奇跡ですよ」とおっしゃるのです。普通の人は中に入ることができないのですが、ぼくは2回上げていただきました。その時にぼくは涙が出てきました。二畳ですよ。会所の賑々しい晴れやかな遊びから、飲食も修行になったのが利休さんの「侘茶」なのですね。

■真台子と皆具

参考資料としていくつかの写真を付けました。最初は唐銅皆具(からかねかいぐ)といいまして真台子で使いますが、表千家では利休所持の皆具が伝わっており、利休所持の唐銅皆具は表千家にしか伝わっていません。茶の湯の世界では、よく「真・行・草」という言葉が使われます。一番格式の高い「真台子」は、足利將軍などの高貴な人々や神仏に茶を奉るときに使用する台子で、中国伝来の道具類が飾られて、唐銅で作られた皆具はまさに「真」の格の道具となります。

春日部市民文化講座 2022年4月27日

「点前座の道具」

序 点前座の道具の変遷と審美眼を養う

Ⅰ. 点前座の主な道具

茶碗、茶入、茶杓、釜、風炉、水指、杓立、建水(水瓢/みずこぼし)、蓋置
茶碗と茶入が重視された私の出会った道具

- 1) 釜 織部筋釜 天明
- 2) 水指 志野 朝鮮唐津 細川護熙作
- 3) 棗 ロシア土産
- 4) 茶碗 ① 瀬戸黒 銘「小原木」
② 瀬戸黒 銘「小原女」
③ 焼き締め 銘「混沌」今井理桂作
- 5) 襖絵 土から墨へ 細川護熙

Ⅱ. 会所の茶から侘数寄へ

1. 侘び数寄の変遷
村田珠光、武野紹鷗、北向道陳、千利休、山上宗二
2. 家元制度による点前道具の好み
 - 1) 三千家十職の制度
 - 2) 一般職人からプロテスト
3. 主客同座から生じた茶道具の変化
晴(はれ)と褻(け)の合体
 - 1) 風炉、炉、炭取り
 - 2) 山上宗二の美意識
唐物を脱皮して和の道具が名物とされる
・「君台觀左右帳記」に記録される道具以外のものが名物とされて取り上げられる
・山上宗二の美意識
・墨跡、掛け絵、茶壺、茶入、水指、釜

Ⅲ. 山上宗二による道具の目利きに変化

- 1) 平蜘蛛釜(芦屋釜) 松永久秀
- 2) 小堀の霰釜「天下一也」
- 3) 古芦屋 真形釜はない
地文の無い天明釜の尊重の呼び名



■侘数寄の道具

次に千利休作の竹蓋置です。竹が400年経つとこういう風合いになるのです。これは風炉用なのか炉用なのか分かりませんが、はじめの頃はそうした区別が無かったのかもしれませんがね。利休さんが良いなあと思って切って作ったのでしょうね。次が「天明筋釜 鍔付遠山」で、天明釜の原風景です。次が利休好みと伝わるの桐木地の丸卓(まるじょく)で、6代覚々斎がその旨を「丸シヨク 利休家伝之棚也」と箱書きし、これに対し8代啖啄斎が「覚々書付無疑者也」と記しています。

次が水指です。「阿蘭陀色絵莨葉文水指(おらんだいろえ たばこのはもん みずさし)」は、

江戸時代に唯一貿易していたオランダから輸入された水指です。「伊賀耳付水指・破袋」は、利休さんの時代のものがいくつか残っています。次が「絵志野水指」(根津美術館蔵)です。いつ焼かれたものなのかが分からないのです。お茶碗は、利休が長次郎に茶碗を焼かす前から所持していたという瀬戸黒茶碗で銘「小原木(おはらぎ)」です。次に、「小原木」と同時代の瀬戸黒茶碗ですが、こちらは千利休の孫の千宗旦が「小原女(おはらめ)」と命名した茶碗です。

■道具との出会い

道具というのは、自分でこれだと思える茶碗などに出会うまでは買わないことですね。高い安いではなく、自分でこれが良いと思えるまでは買わないことです。そうでないと使っている間に嫌になってしまうのです。本物に出会うことが一番なのですが、本物に出会うまではあなたの心打つ本物に近い物を持つことです。そうでなければ、美術館などで本物を見ることです。利休さんは、自分が点前で使う道具は自分で作ったのですよ。例えば竹の茶杓です。それまでは象牙の茶杓だったのを、自分の命を吹き込んで竹を削って茶杓を作り、それが400年も残っているのですよ。そして、今では竹の中節の茶杓が茶の湯では当たり前になっています。あれは利休さんの「茶杓革命」だと言う人もいます。

■おもてなしとは自分の命を差し上げること

道具の善し悪しを見抜く目を養うということは、ぼくたち自身の人格が問われているのだと思います。ですから誰々さんが作って、何処で幾らで買ったものというようなことが茶席の話題になるようなことは、道具に対して失礼なことなのです。その道具が本当にこの茶会に相応しい道具であって、その美しさをキラキラさせることが大切なのです。善い道具というのは理屈抜きで見た瞬間に「あっ、善いなあ!」「あっ、手にしたいな!」と思うものなのです。その価値観というか、美意識をいかにして養うかという、本物を見ていなかったらダメなのです。ぼくたちが茶の湯の世界で、命をどれだけ尊ぶことができ、お越しくださった皆様をどれだけ尊んでおもてなしできるかが大切なことなのです。おもてなしって自分の命を差し上げることですからね。お茶会の中で主客の間で生まれた命というものを感ずることができた人が、そこで一步成長できるのではないのでしょうか。



千利休作の「竹蓋置」

「天明筋釜 鍔付遠山」
右は利休家伝来「丸卓」

「阿蘭陀色絵莨葉文水指(おらんだいろえ たばこのはもん)」



「伊賀耳付水指・破袋」



「絵志野水指」



瀬戸黒茶碗「小原木」



瀬戸黒茶碗「小原女」



■点前座の主な道具

点前座の主な道具としては、茶碗、茶入、茶杓、釜、風炉、水指、杓立、建水(水飜/みずこぼし)、蓋置と書きましたが、これらはぼくたちがお茶を習い始めた時に覚えなければならない道具たちです。だけれども、こうして書きながら、ぼくがこの道具の中で一番大切な道具は、一番価値のある道具は何だろうかと自分に問いかけた時に思ったのは、お客様であり、亭主である自分だということでした。ですから、最高の道具というのは主客であり、一期一会の世界なのです。ここに書いてある道具も茶の湯を楽しむためには大切なのですが、実はぼくたちが道具として一番大切なのです。人のためにお仕えする自分の命が道具なのです。お茶を点てる自分自身が道具じゃないですか。差し上げる相手も土塊(つちくれ)の器であり道具でしょう。だからこそ、美味しいお茶を差し上げなければならないのです。ぼくは今朝の修行として、自分自身のために濃茶を練って飲んできました。美味しい濃茶でした。自らの人生を如何にして自分自身でもてなすことができるのか、人に仕える以上に自分自身に仕えることが大切です。これはイエス様の教えです。「自分を愛するように、自分の隣人を愛しなさい」。凄いでしょこれ、あなたは自分を愛しているのに、どうして隣人の悪口を言ったり、ねたんだり、ひがんだりしているのですか。あなたは愛されているんだから、愛されている自分を大切にしようよ、そして、隣人ももっと大切にしようよ、ということなのですね。

■高山右近が導いてくれた茶の湯の道

ぼくが何で茶の湯を始めたのかというと、高山右近という武将が千利休という茶の湯の先駆者の弟子だったということを知って、ちょっとだけ高山右近の真似をしてみようと思ったのです。その頃ブームだったカルチャーセンターが即中斎宗匠の名で生徒を募集していたので新宿まで通ったのです。その指導者が、久田宗匠のお弟子で、即中斎宗匠とも昵懇の方だったというのがぼくの茶の湯の始まりでした。高山右近がきっかけでお茶を習い始めて、茶の湯の世界には教会とほとんど同じシステムがあるんだなということを学びました。しかも面白かったのは、堺という所で三千家の茶の湯が始まったのですね。

■侘び数寄の変遷

京都で暮らしていた**武野紹鷗**が堺にやってきて「侘茶」を広めるのです。侘茶の創始者とされる**村田珠光**(1422-1502)から侘茶の流れを汲んだのが**武野紹鷗**(1502-1555)と言われております。続いて、レジユメの「侘数寄の変遷」にありますように、家が北向きであったから「北向」と名乗ったという**北向道陳**(きたむき どうちん、1504-1562)という人がいて**千利休**(1522-1591)という流れになります。この北向道陳という人は、千利休の最初の師といわれており、千利休を武野紹鷗の弟子に推薦した人とも言われています。そして、千利休が侘茶を大成させる中で、目利きとして道具の細々とした部分で貢献した人でもあります。現在でも彼の茶杓が遺っています[写真右]。ぼくにとってはまだ分からないところが多いのですが、とても複雑な動きをした人です。千利休の次に直弟子であった**山上宗二**(やまのうえ そうじ、1544-1590)が出てきます。この5名が「侘数寄」の中で登場するのですが、村田珠光と武野紹鷗では約100年開いていて、この関係を説明できる人がいないのです。これが不思議ですね。

■堺の侘茶とキリスト教

武野紹鷗の弟子が千利休です。今、堺に行くと武野紹鷗がお稽古をしていたという四畳半の茶室の写しが観光名所として造られています。毎回、この講演ではお話していますが、武野紹鷗の下で千利休と一緒に侘茶を学んでいたのが、**日比屋了慶**(日々屋了桂)です。この人を覚えておいて欲しいのです。この人の家系には殉教者もいます。キリスト教が弾圧された時に、イエス様をとって殺されているのです。高山右近がフィリピンに流された時に、日比屋了慶の妹がいました。その人はマニラで大きな社会福祉組織の専門家になっています。だから、侘茶の中に戦国武将の高山右近が入ってきて、堺の流れの中でキリスト教と日本固有の文化と言われている侘茶の世界がぼくには繋がったのです。この関係について論文を書いている人もいますが、ほとんどが否定されています。それは証拠が消されてしまっていて無いから仕方がないのです。ぼくの書いたものや主張は、表千家では認められていませんが、武者小路千家の主張とぼくの主張は一つになっているのです。武者小路千家の先代のお家元は「キリスト教の福音を理解しなければ、侘茶の理解はできないと私は思っています」と言っています。でも、残念なことに証拠がないのです。日本の社会というのは、簡単にキリスト教を退ける文化と哲学を持っています。

日本におけるキリスト教の原点は、フランシスコ・ザビエルが来てくださったお陰ですよね。この人を顕彰して堺の街には、「ザビエル公園」という大きな公園があります。そのザビエル公園は日比屋了慶の屋敷跡なのです。なぜそうなのかというと、日比屋了慶の屋敷にザビエルが泊まり、さまざまな宣教師たちがお世話になり、宣教師が初めてそこで茶会を経験した、その手記まで残っているのです。この流れというのは一般にはあまり知られていませんが、歴史の中では大きなうねりになっているのです。

■山上宗二による道具の目利きに大変化

次に「山上宗二による道具の目利きに大変化」というところです。そこに「平蜘蛛釜」というのが出てきます。これは芦屋釜ではないかと言われていました。これを所持していたのが松永久秀だと言われていました。これを信長が所望した時に、断って自分で壊してしまったというのが有名な話です。今日、道具の中でこの「平蜘蛛釜」の話を何故出したかという、戦国時代の武将たちの間では、会所というような場所での遊興娯楽は流行らなくなっていて、自分たちが創りだした文化「侘茶」の中で、それまでは表舞台では使われることのなかった道具を使ってお茶を楽しむようになったということで、一般の職人さんたちがこぞって茶道具を創り始めたのです。芦屋釜もそうですし、天明釜もそうです。

■3つの茶碗

今日、ぼくは3つのお茶碗を持ってきました。千利休の侘茶からすると、皆さんから向かって左の瀬戸黒が一番古いのです。これは楽家10代の旦入(1795-1854)がお家元の許しを得て造った「小原木」の写しです。本歌は重要文化財になっちゃったんですよ。最初に見せてもらった時にガーンとききました。何故かと言うと、この瀬戸黒は長次郎の黒が焼かれる前に利休さんが愛用していた物で、楽の茶碗よりも前に愛されていた茶碗だったということなのです。だけれど、どうしてこういう茶碗が存在していたのかが謎なのです。次に中央は細川護熙さんが焼いてくださった黒茶碗です。この黒は、楽ではないけれども細川護熙さんがぼくに送ってくれた茶碗です。高山右近が書状の中で細川忠興にオレの人生は如何にと問いかける内容なのですが、この茶碗の銘も「如何に ト云」なのです。



向かって右は今井理桂さんというとてもない焼物師がいらして、その人と出会っていただいたものです。「この中で一番好きなお茶碗は？」って聞かれたら、今井理桂さんのお茶碗ですね。今井理桂さんが壊すことも捨てることもできなかったお茶碗で、一生懸命に活かそうと試みて削ったりしたのですが、ここまでということでぼくがいただいたお茶碗です。最初に銘を「カオス」と付けたのですが、ちょっとキザなので「混沌」と変えました。まさにぼくの中にある「混沌」なのです。今日、こうして講演していても違った意見が次々と湧き出てくるのです、まさに混沌としているのですよ。あの混沌とした茶碗が自分の作品なんだけれども、自分の意図しない形で割れてしまっても、中を覗くと大きな火の試練を経て輝いている世界があるのです。それってぼくらの人生と一緒にじゃないですか。世の中には嫌なこともいっぱいあるのだけれども、嫌なことを嫌だ嫌だと言わずに、いらっしやいませって言えばいいですね。

■人肌のぬくもりを求めて

千利休という人がさまざまな人との接触の中で、自分の手の中で心地良くおもてなしをできる茶碗は、この瀬戸黒であり、このサイズなんだなあと思ってこの茶碗を持ってください。要するに掌(たなごころ)に乗るのですよ。そして、侘茶の茶碗の素晴らしさは人肌です。これはぼくも学びましたね。ぼくたちが恋しくなるのは人の温もりであり、手のぬくもりなのです。だから、ぼくは牧師としてお亡くなりになる方の手を取ってお祈りします。そうするとその方が安らかな気持ちになっているということがデータに出てくるのです。千利休がそうした科学的なことを考えていたかどうかは分からないけれども、人生の達人として、おもてなしは人肌だよと理解していたと思います。ぼくはお酒を飲みませんが、お酒だって人肌がいいと言われますよね。やっぱり人の手の温もり、生きている証、それを茶碗に利休さんは求めたのではないかなあというのが、ぼくの高山右近の茶の湯とキリスト教を考察する中で出てきた考えです。

■イエス様が喜んでくださるような器になりたい

死を嫌だ嫌だと長生きしようとするのではなく、来るものであればどうぞという気持ちで臨みたいですね。それができたのが利休さんだったのです。利休さんは遺偈(ゆいげ)の中で言っているでしょう。「人生七十(じんせいしちじゅう)、力圀希咄(りきいきとつ)、吾這寶劍(わがこのほうけん)、祖佛共殺(そぶつともにくろす)、堤る我得具足の一太刀(ひっさぐるわがえぐそくのひとつたち)、今此時ぞ天に抛(いまこのときぞてんになげうつ)」これってウェルカムですよ。自分の死によって、自分は全てを投げ捨てたことによって、自分が命を注いだ侘茶が今ある、と自分が作った侘茶の世界で死んでいったのですからね。利休さんという人は、そういう人生を歩んだ人なのです。そして、弟子の高山右近も全部を捨てたのです。細川忠興に「オレの人生は如何に」っていうくらいに晴れ晴れしく。千利休が長次郎に焼かせて作らせたのが、赤であり黒であります。ですから、ぼくたちは自分好みの器でなくて、ぼくはイエス・キリストを信じる信仰者ですから、イエス様が喜んでくださるような器になれたらなって思います。その器は、欠けただけで、出しゃばりで汚くて、作った者さえも捨てたくなるような器だけれども、「高橋敏夫、お前なかなか味わいのある欠けた器になったじゃないか」って言われるような高橋敏夫君になりたいと思います。〔完〕

「侘茶の道具で一番の器は自分自身、そして試練の中で輝きを持つ器になれ！」との高橋先生のご指摘が！